

# EPAが豊富なナンノクロロプシス

## イービス藻類産業研究所が 石巻で培養・製品化



上：巨大な培養池、下：後藤博史所長から説明を受ける今野晃取締役社長（右）

宮城県石巻市牡鹿半島の先端部、鮎川港に近い十八成浜清崎山に、巨大なビニールハウスで覆われた施設がある。株式会社イービス藻類産業研究所（石巻市、寺井良治代表取締役）が、将来性の高い微細藻類の培養と製品化を行っている施設になる。

培養しているのは、「ナンノクロロプシス」。直径約2〜5μmほどの非常に小さな海の植物プランクトンの一種。特筆すべきは、油含有量が高く、オメガ3脂肪酸のEPA（エイコサペンタエン酸）、ビタミン、

ミネラル、アミノ酸など61種類の栄養素が含まれること。

中でもEPAは、他の藻類と比較して圧倒的な含有量で、ユーグレナやクロレラの約10倍という。EPAは、血液をサラサラにした

り、血中の中性脂肪を下げたり、動脈硬化を防ぐなどの働きをされるとわれ、美容や健康面で近年注目が高まっている。

生率を改善することなどに役立てている。

また、原料粉末からサプリメントや健康食品、食品、化粧品に加え、将来的に医薬品への展開が期待される。

EPAは従来、主に魚油を素材として抽出・精製されてきたが、世界的な資源問題もあり、植物・藻類由

来の製品化が求められているという。いわば、社会課題の解決に役立つ可能性を秘めた商品と言える。

株式会社イービス藻類産業研究所の後藤博史仙台事務所所長は「魚に頼らずEPAを作るには、ナンノクロロプシスが適しており、世界的にもこの流れは強くなっています」と語る。

### 5000万円の投資が行われた

海抜80mに位置する同施設では、「ナンノクロロプシス」を屋内で培養、その後、ビニールハウス内にある1〜130㎡まで7つの培養池で大量培養され、脱水・濃縮などの工程を経て製品化している。培養には大量の海水が必要だが、隣接地から汲み上げた海水をろ過して使用している。

課題の一つは、温度管理。培養する海水の温度を10〜20度程度に保つ必要がある。夏は遮光ネットなどを活用し、温度調整を図ることで年間通した生産が可能になっている。

同社に対しては、株式会社七銀行（小林英文取締役頭取）と七十七キャピタル（今野晃取締役社長）が組成した「七十七キャピタル第2号投資事業有限責任組合」から5000万円の投資が実行された。今野取締役社長が現地を訪れ、施設の概要や特徴などの説明を受けており、今後の商業展開に向けた増資に応じた内容になっている。

後藤所長は、「ナンノクロロプシスの知名度を高めて利用の幅を広げ、地域に貢献していきたい」と語った。